



パラウク・ワ語における共時的な語形成

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道言語研究会 公開日: 2016-04-27 キーワード (Ja): パラウク・ワ語, 語形成, 派生法, 共時論 キーワード (En): 作成者: 山田, 敦士 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/00008878

パラウク・ワ語における共時的な語形成

山田敦士

Synchronic Analysis of Word Formation in Parauk Wa

Atsushi YAMADA

要旨 パラウク・ワ語（モン・クメール語族、雲南省～シャン州）は、単音節を基調とする言語である。しかし、多音節語も語彙体系の一部として無視することができない。パラウク・ワ語の語形成に関する先行研究には、音韻論と形態論の非区別、共時論と通時論の非区別という共通の問題がある。語形成全体の把握が困難である状況を踏まえ、本稿では、共時的な観点から語形成法の再検討をおこなった。筆者の分析によると、パラウク・ワ語における共時的な派生手法には接辞法と複合法が認められ、このうち真に生産的といえるのは複合法のみである。その一方で、パラウク・ワ語の語彙の一部には、モン・クメール語族に特徴的な、形態法の痕跡を認めることができる。本稿でおこなった共時的分析は、将来的な通時の研究の土台となるものである。

キーワード：パラウク・ワ語、語形成、派生法、共時論

1. はじめに

中国雲南省からミャンマーのシャン州にかけて分布するパラウク・ワ語（モン・クメール語族パラウン語派）は、単音節を基調とする孤立語タイプの言語である。しかしながら、多音節からなる語彙も少なからず存在する。こうした多音節語は通時的観点から、興味深い研究対象となっている（山田 2015a、2015b）。

モン・クメール語族は一般に、周辺のタイ諸語などと比べ、豊かな形態法を発達させたとされる。パラウク・ワ語の語形成法は、主に中国人学者によって研究がなされてきたが、その全体像を解明するには至っていない。そこで本稿では山田（2009）の記述をベースに、共時的な観点からパラウク・ワ語の語形成法について再検討をおこなう¹。

¹ パラウク・ワ語の音韻体系は次のとおりである。

子音：p, ph, b, bh, t, th, d, dh, c, ch, j, jh, k, kh, g, gh, ʔ, m, mh, n, nh, ɲ, ɲh, s, h, v, vh,
y, yh, r, rh, l, lh

母音：i, u, e, ɛ, o, ɔ, a, ɔ

超分節素：非弛緩（無標）／弛緩（母音に下線で表示）

音節構造：C₁(C₂)V₁(V₂)(C₃)／C₂: r, l, V₂: i, u, e, o, a, ɔ C₃: p, m, t, n, k, ɲ, h, ʔ

2. 先行研究の問題点

パラウク・ワ語の語形成に言及したものとして、周・顔（1984）、黄・王（1994）、王・陳（1994a、1994b）、趙・趙（1998）などがある。しかし、その記述内容に本質的な違いは存在しない。以下、それぞれに共通する問題点を二つ指摘する。

2.1 音韻論と形態論の非区別

パラウク・ワ語の研究においては、モン・クメール語学の伝統に準ずるかたちで、音節を一般的なもの（Major Syllable）と副次的なもの（Minor Syllable）に分類することが一般的である²。分類の根拠として、後者における種々の音韻制約（V₁、C₂やC₃における共起制限、超分節的要素の逆行同化など）が指摘される。中国人学者は、前者を“一般音节”や“主要音节”、後者を“附加音节”や“次要音节”、“前置音”などと呼ぶ。煩雑さを避けるため、以下では、前者を「主音節」、後者を「副音節」と呼ぶことにする。

この「副音節」について、王ほか（1994a）は、形態法上の“前綴”（接辞）に相当するとみなす。また周ほか（1984）では、「副音節」相当を“前加成分”（前置成分）と呼んでいる。これは例えば、(1) や (2) において、「副音節」/si/による派生関係が想定されるためである。

- | | | | | | |
|-----|------------|-------|---|--------------|------|
| (1) | <i>meʔ</i> | 「配偶者」 | — | <i>simeʔ</i> | 「男性」 |
| (2) | <i>vɔk</i> | 「刈る」 | — | <i>sivɔk</i> | 「鎌」 |

こうした、「副音節」と形態法との関連の認定は、パラウク・ワ語研究において一般的であるように見受けられる。しかし、こうした見方は次の二点において適切ではない。まず、形態法とリンクしない「副音節」の事例を指摘することができる。(3) (4) はともに/si/に関する例である。

- | | | | | |
|-----|---------------|------|---------------------|-----|
| (3) | <i>siŋaiʔ</i> | ～ | <i>ŋaiʔ</i> | 「日」 |
| (4) | <i>sibeʔ</i> | 「衣服」 | (cf. * <i>beʔ</i>) | |

(3) は「副音節」/si/の有無が意味的な違いをもたらさない例である。一方(4)は、「副音節」/si/のない形式を設定することができない例である。このように、「副音節」を無条件に形態素として認めることは困難である。

そもそも、「副音節」は多音節語における弱化現象として分析されるものであり、本質的に形態法とは別次元の問題と考えるべきである。例えば次の(5)は明らかな複合語であるが、パラウク・ワ語の固定的なアクセントパターン（弱 - 強）に従うかたちで、前

² こうした分類は、例えば、クメール語における代表的な音声・音韻研究である Henderson (1952) などにみられ、モン・クメール語族の特徴とみなされてきた。現在では、東アジアから東南アジアの諸言語（漢系やチベット・ビルマ系、タイ系言語）にも広くみられる音声・音韻現象とする見方が定着している (Thomas 1992)。

部音節が弱化して実現されることがある。

- (5) *maoʔkhlaʔ* ～ *makhlaʔ* 「ベルト」 (＜ *maoʔ* 「紐」、*khlaʔ* 「ズボン」)

「副音節」には、(5) のように一般音節の臨時的な弱化状態であるものと (1) ～ (4) のように弱化が半ば固定化したものとが存在する。したがって、「副音節」という音韻特徴と接辞などの形態法は明らかに区別すべき概念であり、現象であるといえる。

2.2 共時論と通時論の非区別

黄ほか (1994) は、パラウク・ワ語における代表的な文法記述の一つである。その中で、「副音節」について、“构词”と“构形”という二つの機能を認めている。(6) の *pa* および (7) の *ji* が前者の例、(8) の *du* および (9) の *su* が後者の例である。

- | | | | | | |
|-----|-------------|--------|---|--------------------------|---------|
| (6) | <i>ʔauʔ</i> | 「プラン族」 | — | <i>paʔauʔ</i> | 「プラン族」 |
| (7) | <i>rah</i> | 「蛙」 | — | <i>jirah</i> | 「蛙」 |
| (8) | <i>dik</i> | 「踏む」 | — | <i>du^udik</i> | 「何度も踏む」 |
| (9) | <i>siah</i> | 「細かい」 | — | <i>susiah</i> | 「粉々だ」 |

前者について、母音は /a、i/、音節末はゼロまたは /i、ŋ、k/ という音韻形式をとり、具体的な意味が判別できないとする。黄ほか (1994) における“构词”とは、形態素として認定することのできないもの、つまり単なる「語の構成要素」になることを指すと推測される。確かに、この *pa* や *ji* は単独での意味が定かでなく、並行的事例にも乏しい。派生プロセスが推定できないため、“构词”の事例は共時的な分析対象にすべきではないと考えられる。

一方、後者について、音節頭子音が共通、母音が /u/ という部分重複の形式が認められる。その意味は、動詞であれば多回性、形容詞であれば程度の強調を表わすとする。黄ほか (1994) における“构形”とは、「語形成法に關与する」機能を指すものと推測される。しかし、後者の形式・意味であっても、語彙的なペアを形成しないものが存在する。

- | | | | |
|------|------------------|-----------|----------------------|
| (10) | <i>phruphrat</i> | 「飛び回る」 | (cf. <i>*phrat</i>) |
| (11) | <i>pupi</i> | 「曖昧模糊とした」 | (cf. <i>*pi</i>) |

(10) (11) では、部分重複しない「元々の形式」を想定することができない。こうした状況から、かつて部分重複という形態手法があったものの、今日では生産性を失い、それぞれが語彙化していると考えるのが妥当であろう。“构形”の事例もまた、共時的な分析対象とすべきではないといえる。

また形態法の一つとして、内部屈折法を指摘する研究も少なくない。例えば王ほか (1994b) は、(12) から (15) など内部屈折の事例とする。

- (12) *pih* 「掃く」 — *bih* 「箒」
 (13) *pu* 「厚い」 — *bu* 「厚さ」
 (14) *ʔaʔ* 「一人称双数包括形」 — *ʔeʔ* 「一人称複数包括形」
 (15) *ʔin* 「これ」 — *ʔan* 「あれ」

(12) (13) は子音交代の例、(14) (15) は母音交代の例である。しかしながら、このような内部屈折もすでに生産的な形態手法ではない。部分重複と同様、内部屈折の事例についても、共時的には語彙化したものとして記述すべきである。

3. 語構成の再整理

先行研究の問題点を踏まえ、以下では、パラウク・ワ語の語形成について再整理をおこなう。パラウク・ワ語の語彙は大きく単純語と派生語に分けることができる。単純語はその構成から、単音節からなるものと多音節からなるものに分けられる。一方、派生語について、形態手法の観点から、接辞法によるものと複合法によるものに下位分類される。各項目の詳細を次節以降に述べる。

表 2. 語の分類

単 純 語	単音節	<i>pu</i> 「人」、 <i>hu</i> 「行く」
	多音節	<i>lɔli</i> 「車」、 <i>sala</i> 「牧師」、 <i>makkram</i> 「唐辛子」 <i>susiah</i> 「粉々だ」、 <i>kruŋkram</i> 「バラバラだ」、 <i>dudik</i> 「何度も踏む」 <i>siɣɔk</i> 「鎌」、 <i>siɱeʔ</i> 「男」、 <i>sidim</i> 「9」 <i>kaŋkɔi</i> 「ウサギ」、 <i>praŋprɔk</i> 「大根」、 <i>puŋpian</i> 「蝶」、 <i>paŋpen</i> 「テーブル」、 <i>caŋklat</i> 「滑って転ぶ」、 <i>ʔakchɔʔ</i> 「カマキリ」 <i>preʔpruɱ</i> 「食物」、 <i>rhɔmrhi</i> 「心」、 <i>vhaikvhuik</i> 「漆黒だ」、 <i>tauʔyen</i> 「漬物」、 <i>riɸprauʔ</i> 「アイダガヤ」、 <i>breʔlak</i> 「盗む」、 <i>pɔttiam</i> 「書く」
派 生 語	接辞法	<i>kɔnhɔʔ</i> 「漢人」(< <i>kɔn</i> - 「(指小)」、 <i>hɔʔ</i> 「漢族」) <i>taʔsen</i> 「センさん」(< <i>taʔ</i> - 「(敬意)」、 <i>sen</i> 「(人名)」)
	複 合 法	従属式 <i>mauʔkhlaʔ</i> 「ベルト」(< <i>mauʔ</i> 「縄」、 <i>khlaʔ</i> 「ズボン」)、 <i>tauʔbu</i> 「アブラナ」(< <i>tauʔ</i> 「野菜」、 <i>bu</i> 「油」)
		重複式 <i>taʔtaʔ</i> 「おじいさん」(< <i>taʔ</i> 「祖父」)、 <i>mɛʔmɛʔ</i> 「おかあさん」(< <i>mɛʔ</i> 「母親」)
		並列式 <i>ʔiasim</i> 「鳥類」(< <i>ʔia</i> 「鶏」、 <i>sim</i> 「鳥」)、 <i>lauʔluiŋ</i> 「損壊した」(< <i>lauʔ</i> 「壊れた」、 <i>luiŋ</i> 「焦げた」)

4. 派生語

現代パラウク・ワ語において、派生語形成に関わる形態手法は接辞法と複合法である。

4.1 接辞法

接辞法は接頭辞に限られ、その数も限定的である。現在までに接頭辞として認められているのは、*taʔ*-, *yɛʔ*-, *kɔn*-のみである。いずれも名詞に敬意や親しみの意味を加えるのみであり、品詞性の転換などは引き起こさない。

接頭辞 *taʔ*-は、年上の男性を表わす人名や職名などに前置され、敬意を付加する機能をもつ。一方、接頭辞 *yɛʔ*-は、年上の女性を表わす人名や職名などに前置され、敬意を付加する機能をもつ。

- (16) *taʔ-sen* 「センさん」 (*sen* 「(人名)」)
- (17) *taʔ-kɔʔ* 「部落長様」 (*kɔʔ* 「部落長」)
- (18) *yɛʔ-rɔŋ* 「ロンさん」 (*rɔŋ* 「(人名)」)
- (19) *yɛʔ-kuat* 「お年寄り」 (*kuat* 「年寄り」)

両者は名詞 *taʔ* (「祖父」) および *yɛʔ* (「祖母」) との語源的関係が推定される。

kɔn-については、各民族称または「人間」の意味を表わす一般名詞などに前置され、名詞の表わす集団に対する敬意や親しみを付加する。

- (20) *kɔn-hɔʔ* 「漢族さん」 (*hɔʔ* 「漢族」)
- (21) *kɔn-pui* 「人間様」 (*pui* 「人間」)

周ほか(1984)や趙ほか(1998)では、この *kɔn*-という形式について、名詞 *kɔn* (「子」) との語源的関係を推定した上で、次のような接頭辞の例示をおこなっている(表記は筆者のものに改めてある)。

- (22) *kɔnsim* 「子鳥」 (*sim* 「鳥」)
- (23) *kɔnkrauʔ* 「子芋」 (*krauʔ* 「芋」)

これらは一見、対象の指小性を表わしているようにも思われるが、「子」という名詞との複合あるいは名詞句とも解釈することができる。「子」という原義を考えた場合、指小の意味は親近の意味よりも「子」という原義に近い位置にあることは想像に難くない。以上の事実を踏まえた上で、本稿では、「子」という原義で解釈できない上記の民族称や「人間」を表わす名詞についた場合のみを接頭辞 *kɔn*-と認めることにする。

4.2 複合法

複合法はかなり生産性をもつ語形成法である。その内部構成から三つのタイプ(従属式、重複式、並列式)が認められる。

(28) については、その内部に主語と述語の関係が存在する。(29) では目的語と述語の関係が存在する。(30) (31) は斜格補語と述語の関係があり、(30) の主要部名詞は場所、(31) の主要部名詞は道具の意味役割を担っている。

複合動詞

「動詞（形容詞を含む）」＋「動詞（形容詞を含む）」の組み合わせ

- | | | | | | |
|------|-----------------|---|-------------|---|-------------|
| (32) | <i>duttuk</i> | < | <i>dut</i> | + | <i>tuk</i> |
| | 引き切る | | 切れる | | 引く |
| (33) | <i>krohphru</i> | < | <i>kroh</i> | + | <i>phru</i> |
| | 吹き乾かす | | 乾く | | 吹く |
| (34) | <i>dutyuh</i> | < | <i>dut</i> | + | <i>yuh</i> |
| | 切る | | 切れる | | する |
| (35) | <i>krohyuh</i> | < | <i>kroh</i> | + | <i>yuh</i> |
| | 乾かす | | 乾く | | する |

(32) (33) は「結果状態」＋「行為」という組み合わせからなる複合動詞である。この複合動詞の意味するところは、「行為」とそれに伴う「結果状態」という一連の流れである。この複合動詞における主要部は前要素の「結果状態」とであると解釈される。なぜならば、「結果状態」を表わす動詞の無意志性が複合動詞全体に引き継がれていると考えられるからである³。(34) (35) は *tuk* (「引く」) や *phru* (「吹く」) のような具体的な動作を表わす動詞の代わりに、*yuh* (「する」) という代動詞が用いられていると解釈することができる。この複合動詞の意味的な特徴については、統語的な動詞連続との関係を含め、稿を改めて述べることにしたい。

4.2.2 重複式複合法

重複式複合法とは、語幹同士の結合のうち、同一語幹による全体重複をおこなうものである。パラウク・ワ語において、この方式はかなり限定的といえるが、大きく二つに分類できる。一つは、(36) (37) のように、親族称をあらわす形式を重複するものである。

- | | | | | | |
|------|---------------|---------|---|------------|------|
| (36) | <i>taʔtaʔ</i> | 「おじいさん」 | < | <i>taʔ</i> | 「祖父」 |
| (37) | <i>mɛʔmɛʔ</i> | 「お母さん」 | < | <i>mɛʔ</i> | 「母親」 |

こうした親族称の重複形式は、子供から両親、祖父母に対する呼びかけにおいてのみ許容されるようである。親族称一般に汎用性のあるものではないため、幼児語である可能性もある。

もう一つのタイプは、(38) から (42) のように、程度の甚だしさ、数量の多さなどを表わすような重複形式である。

³ 意志性のない動詞が主動詞であることにより、事態発生がアクシデントであるというニュアンスが生じる。事態が実現済みの文脈にて用いられる傾向があることなどは、文全体が無意志的であることの傍証と考えられる。

- (38) *cui?cui?* ~ *cui?cui?* 「少々」 < *cui?* 「少し」
 (39) *di?di?* ~ *di?di?* 「昔々」 < *di?* 「昔」
 (40) *tiuh?tiuh?* ~ *tiuh?tiuh?* 「あっち（遠くを指して）」 < *tiuh?* 「あちら」
 (41) *mhəmmhəmm* ~ *mhəmmhəmm* 「非常によい」 < *mhəmm* 「よい、きれい」
 (42) *kəihkəih* ~ *kəihkəih* 「何度も掻く」 < *kəih* 「掻く」

以上は [554.21] のピッチ（5 が最高、1 が最低）で示されるような独特のイントネーションを伴って実現され、前部音節の末尾子音が発音されない場合もある。これらは強意を示す同形式の統語的連続である可能性も否定できない。

4.2.3 並列式複合法

並列式複合法とは、複合語を構成する要素に主要部が存在せず、両者が同資格にて結びついているように見えるものである。

- | | | | | | |
|------|-----------------|---|-------------|---|-------------|
| (43) | <i>məikrak</i> | < | <i>məi</i> | + | <i>krak</i> |
| | 耕畜 | | コブ牛 | | 水牛 |
| (44) | <i>ʔiasim</i> | < | <i>ʔia</i> | + | <i>sim</i> |
| | 鳥類 | | 鶏 | | 鳥 |
| (45) | <i>kauŋma</i> | < | <i>kauŋ</i> | + | <i>ma</i> |
| | 田畑 | | 水田 | | 焼畑 |
| (46) | <i>mə?moŋ</i> | < | <i>mə?</i> | + | <i>moŋ</i> |
| | 夫婦 | | 夫 | | 妻 |
| (47) | <i>mə?kuŋ</i> | < | <i>mə?</i> | + | <i>kuŋ</i> |
| | 父母 | | 母 | | 父 |
| (48) | <i>haukhuan</i> | < | <i>hauk</i> | + | <i>huan</i> |
| | 発展する | | 上る | | 膨れる |

この語形成には、「類似並列法」と呼ぶ修辭的技法が深く関与している。類似並列法とは、意味的に類似・相対する語を並列させ、全体として包括的な概念を表わすというもので、パラウク・ワ語の文法の様々なレベルにおいて用いられている（山田 2011）⁴。

ところで（43）から（48）においては、二つの構成素はそれぞれ独立して用いられ得るものであった。しかし、第2要素が単独では用いられない形式の場合がある。

⁴ 以下に類似並列の例を挙げる。{ }にて示した並列要素は、統語的特徴が等価である。

(A) *ʔai* { *li* *ju* } { *hauk* *blaŋ* }
 (人名) 下る 下り坂 上る 上り坂
 「アイはウロウロした」
 (B) { *hauh* *kən* *bun* } { *hun* *kən* *sime?* }
 多い 子 女 多い 子 男
 「子孫が多い（女の子が多く、男の子も多い）」

- | | | | | | |
|------|------------------|---|-------------|---|---------------|
| (49) | <i>kaiŋjɔ</i> | < | <i>kaiŋ</i> | + | <i>*jɔ</i> |
| | 仕事 | | 仕事 | | |
| (50) | <i>prɛʔpruɯm</i> | < | <i>prɛʔ</i> | + | <i>*pruɯm</i> |
| | 食物 | | 食物 | | |
| (51) | <i>rhɔmrhi</i> | < | <i>rhɔm</i> | + | <i>*rhi</i> |
| | 心 | | 心 | | |
| (52) | <i>lhaklhiɔ</i> | < | <i>lhak</i> | + | <i>*lhiɔ</i> |
| | 賢い | | 賢い | | |
| (53) | <i>mhɔmmhiam</i> | < | <i>mhɔm</i> | + | <i>*mhiam</i> |
| | よい | | よい | | |

(49) から (53) の第 2 要素は常に決まった自由形態に付随して用いられる拘束形態である。しかし、これらは接辞ではなく語幹とみなすべきである。その理由として、統語的振る舞いが並列式複合法の後部構成素と平行する点を指摘することができる。

- | | | | | | | | |
|-------|--------------------|----------------|--------------------------------|----|-------------|----|---------------|
| (54) | <i>neʔmɔi</i> | <i>neʔkrak</i> | (<i>neʔ</i> , <i>mɔikrak</i> | < | <i>mɔi</i> | + | <i>krak</i>) |
| | 耕畜の肉 | | 肉 | 耕畜 | コブ牛 | 水牛 | |
| (55)* | <i>neʔmɔikrak</i> | | | | | | |
| (56) | <i>dauʔrhɔm</i> | <i>dauʔrhi</i> | (<i>dauʔ</i> , <i>rhɔmrhi</i> | < | <i>rhɔm</i> | + | <i>*rhi</i>) |
| | 心の中 | | 中 | 心 | 心 | | ? |
| (57)* | <i>dauʔrhɔmrhi</i> | | | | | | |

(54) (55) は並列式複合法の例 (43) の句形成での振る舞いを示す。並列式複合法においては、(54) のように主要部を繰り返すかたちで句形成がなされる。(55) のような形式は非文法的である。一方、(56) (57) は後半が拘束形態である並列式複合法の例 (51) の句形成での振る舞いである。こちらも主要部を繰り返すかたちでのみ、句形成がおこなわれる。

この拘束形態は、(50) から (53) のように先行する語と頭子音を同じくする場合が多い。その起源については借用の問題も含め、検討の余地が大いにある。

5. おわりに

本稿では、パラウク・ワ語の語形成に関する先行研究の問題点（音韻論と形態論の非区別、通時論と共時論の非区別）を踏まえ、共時的観点からその再検討をおこなった。現代パラウク・ワ語は形態的手法に乏しく、生産的といえるのは複合法のみである。しかしながら、通時的にはモン・クメール語族の例にもれず、種々の派生がおこなわれたようで、その痕跡が単純語として残存している。パラウク・ワ語の語形成全体を解明するために、次の 4 点を今後の課題としたい。

- ① 単純語の通時的分析
- ② 内部屈折法の通時的分析
- ③ 借用語の分析
- ④ 並列式複合法における拘束形態素の分析

謝辞

本稿は、JSPS 科研費基盤研究 (C)「漢語語彙史における複音節化現象の総合的研究」(代表者: 松江崇) (課題番号: 25370454) および基盤研究 (B)「言語・文化調査に基づくタイ文化圏の少数民族の歴史の解明」(代表者: 新谷忠彦) (課題番号: 15H05154) による調査研究の成果の一部である。調査に協力してくれた方々に謝意を示したい。

参考文献

- Henderson, Eugénie J. A. (1952) The Main Features of Cambodian Pronunciation: *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 14(1), 149-174
- 黄同元・王敬骝 [Huang, Tongyuan・Wang, Jingliu] (1994)「佤语概述」、王敬骝ほか 編 (1994) に所収、1-38
- Thomas, David (1992) On Sesquisyllabic Structure: *Mon-Khmer Studies* 21, 206-210
- 王敬骝・陈相木 [Wang, Jingliu・Chen, Xiangmu] (1994a)「佤语岩帅话的音位系统」、王敬骝ほか編 (1994) に所収、39-57、(原載は『民族调查研究』云南民族学院、1981)
- (1994b)「佤语词的形态变化」、王敬骝ほか編 (1994) に所収、117-129、(原載は『民族调查研究』云南民族学院、1984)
- 王敬骝・张化鹏・肖玉芬 [Wang, Jingliu・Zhang, Huapeng・Xiao, Yufen] 編 (1994)『佤语研究』、云南民族出版社
- 山田敦士 (2009)『パラウク・ワ語記述文法』北海道大学博士論文 (未公刊)
- (2011)「パラウク・ワ語における類似並列表現の構造」『アジア・アフリカの言語と言語学』5号、3-16
- (2015a)「佤语的多音节单纯词初探」国際シンポジウム「汉语复音化和复音词相关问题 (漢語における複音節化と複音節語に関する諸問題)」、1月31日、北海道大学
- (2015b)「ワ語における複音節化現象」日本言語学会第151回大会、11月28-29日、名古屋大学
- 赵岩社・赵福和 [Zhao, Yanshe・Zhao, Fuhe] (1998)『佤语语法』、云南民族出版社
- 周植志・颜其香 [Zhou, Zhizhi・Yan, Qixiang] (1984)『佤语简志』、民族出版社

執筆者紹介

氏名: 山田敦士

所属: 日本医療大学保健医療学部

E-mail: a_yamada@nihoniryo-c.ac.jp